

9th

日本構造医学会 大阪学術会議

Japan Society of Structural Biomedical Science

ポスター発表

自己免疫性肝炎における 構造医学的アプローチの効果

吉田 雅弘

(福岡県 柔道整復師)

はじめに

自己免疫性肝炎とは、中年女性に多い病気で、ウイルス性の病気の多い我が国にあっては珍しくウイルス性ではない肝臓病である。生体は外界から侵入してくるウイルスや細菌など、非自己（自分でないもの）に対して免疫反応を起こすが、自己免疫性肝炎の原因は不明とされており、通常、発見されたときは慢性肝炎になってしまっていることが多い。しかも肝炎は活動的に急激に肝硬変になることが多く、基本的に一生治ることのない病気とされている。

この大変厄介な病気に遭遇したのは、筆者の母親74歳（5年間の養護教員の経験、平成2年退職まで〇〇病院にて20年間の看護師の経験があり、医学的知識、医療現場をよく知っていた）が罹患したためである。

母親は町の定期健診で肝機能の数値が高いことが確認され、自宅近くの□□クリニックで血液検査を定期的にかけていた。もともとじっとしてられない性格で、やれ旅行だ、大正琴の

発表会だ、太極拳の練習だとほとんど休みなく行事をこなして疲労困憊したために、いっきに数値が上昇したと思われる。

平成15年10月15日／GOT<AST>：118、

GPT<ALT>：185

10月22日／GOT<AST>：123、

GPT<ALT>：166

11月6日／GOT<AST>：167、

GPT<ALT>：259

GPT<ALT>の数値が259に上昇したため、□□クリニックより〇〇病院に転医。検査の結果、自己免疫性肝炎と診断される。病院では、1週間後の再検査しだいで入院をすすめられる。

筆者の母親は、もともと〇〇病院で看護師をしていたため、担当医に病状、治療の指針を聞き、ステロイド剤（プレドニン40mg）の投与にていっきに数値を下げる治療に不安を感じていた。副作用の怖さをよく知っていたことによる。担当医もできるだけステロイド剤の投与は

避けたいとのことであるが、数値が下がらねばしかたがないという。

担当医より、薬は飲まないこと、安静にすること、5年後には肝硬変になる可能性があることが告げられ、処置としてウルソを投与される。ウルソの成分は、熊の胆（胆汁酸）であり、肝臓が硬くならないためとのことである。

構造診断および経過

・初診（平成15年11月8日）

<症状>

極度の倦怠感、立ち歩きしただけで横になって休まないといられない。

<構造診断>

L-AS [PIt]

<処置>

1) リダクター

座位ベッドにて約10分間、できるだけ脊柱に対して垂直になるようにリダクターをかける。これは福岡で行われた学会にて、医療ブースで見た吉田先生のリダクターのかけかたのビデオが大変参考になった。

リダクターをかけると右背部、とくに胸腰移行部付近に筋肉の硬結を感じる。本人に聞くと攀ったような痛みがあるという。

2) WBの面圧整復

3) 肝臓への氷冷却

氷冷却は自宅に帰り、とにかく四六時中行うように伝える。製氷機にて作るチップアイスで発泡スチロールの箱に詰めて持ち帰らせる。

・11月10日

同上処置を行う。

本人に聞くと冷却している患部は、チクチクと痛く、こんなに冷やすと体によくはないのでは

ないかという。炎症反応のために患部にチクチク感があるが、炎症が治まると痛みもなくなるので辛抱するようにと説得する。本人は半信半疑で冷却しているので、途中で投げ出さないように管理するのが大変である。肝臓病に他にどんな治療があるのか、本人もよくわかっているため、これほど体にリスクのない治療は他にないので、とにかく続けていくことを論ずる。

・11月11日～27日

同上処置で12回治療を行う。

14日、本日行なった〇〇病院の検査データを持ってくる。GOT<AST>：123、GPT<ALT>：180。数値が下がっていたので担当医もこのまま経過を見ようといわれる。

25日、リダクターをかけたあと、硬結部は少いぶん軟らかくなってきた。本人も治療後は少いらくになったという。

・11月29日

前日行なった病院の検査データを持ってくる。GOT<AST>：141、GPT<ALT>：211。以前より数値は上昇、本人は少し気落ちしたように見える。担当医より上がったたり下がったりするものだといわれたが、筆者も数値は下がっているものと思っていたので少し不安になった。おそらく少いらくになったので動き回ったのではないかと思われる。本人に安静にといても、することが一杯あるのでじっとなどしてられないという。

吉田先生の講義であったように、肝臓の氷冷却やリダクターのヒートポンプ効果により肝臓部の鬱熱を取ることで修復をはかり、機能の改善を待つ。生物の修復には期間が必要なことをわかってはいるつもりでも、早く結果がでなけ

ればと、本当に祈る思いで治療にあたった。担当医からは数値の上昇をみて肝生検をして肝臓の状態を知り、ステロイド剤の投与にて数値を下げるために入院することを強くすすめられる。母親はとにかく入院はしたくないと拒む。処置としてウルソの量が増える（1日9錠）。

• 12月1日～28日

17回治療を行う。

リダクターによる背部の硬結は日増しになくなるのを実感する。ローラーの通りが滑らかになり、倦怠感も以前より少なくなったという。自宅では朝、昼、夜と氷冷却を続ける。

• 16年1月5日～24日

14回治療を行う。

24日、前日行なった病院の検査データを持ってくる。GOT<AST>：88、GPT<ALT>：127。数値が下がっていたので本人も安心したようだ。ただ正常値は、GOT<AST>：10-40、GPT<ALT>：5-40であるので、3桁から2桁になるまで予断を許さないとされる。しかし、数値として改善されていくのがわかるのは、治療の励みになる。

リダクターの通りは滑らかで、ほとんど硬結もなくなってきた。倦怠感も随分少なくなった。ただし、胸焼けがひどいという。おそらくウルソ（胆汁酸）の量が増えたせいだと思われる。

• 2月2日～20日

11回治療を行う。

20日、本日行なった病院の検査データを持ってくる。GOT<AST>：42、GPT<ALT>：49。この数値を見て、担当医が開口一番ウワーと驚きの声を上げたとのこと。本人も大変驚い

ていた。感覚的に治ってきていると自覚はあったが、まさかここまでとは思わなかった。筆者自身もあらためて構造医学のすばらしさを痛感した。ただし、これから先、数値の変動があるかもしれないので検査は続けて行なっていく。

考 察

平成15年11月8日より平成16年2月20日まで、延べ日数105日、治療実日数62回。

氷冷却することにより肝臓の鬱熱を取ることによって病変を抑え、肝細胞の旺盛な回復力で修復する。3か月というのは、肝臓氷冷却の一つの目安になるのではないかとと思われる。

しかし、この氷冷却は患者本人の自覚がないと到底できないことでもある。母親に聞くと、それは、それは涙ぐましい努力であったという。朝、昼、夜と氷冷却を続けるのは、やはり大変なことである。はたで見ていた父親は、冬の寒い時期に氷を着けている姿を見ると、目をしかめ、そんなに冷やして大丈夫なのかと心配した。他人の要らぬ一言で迷う人もいるので注意が必要である。一般的に温めることには馴染みがあるが、冷やすことには馴染みが薄く、氷が融けるときに融解熱で放熱して炎症性の熱を抜くのだと説明して理解させようとしてもなかなかむずかしい。

一方、リダクターによる治療は非常にわかりやすいと思われる。母親に聞くと、どうもリダクターによる治療がよかったという。硬結がほぐれてくると同時に体調がよくなるのを実感していたためである。これは治療していた筆者自身も感じていた。そしてWBにおける面圧整復と、以上の構造医学アプローチの相乗効果によってよい結果がでたのだと思われる。

ウルソ（胆汁酸）の効果については、私見で

あるが、劇的に数値が下がるような効果はなかったように思われる。

まとめ

通常であれば、自己免疫性肝炎と診断され、GOT<AST>：167、GPT<ALT>：259の数値で極度の倦怠感があれば、即入院を担当医からいいわたされ、それを断る患者はあまりいないと思われる。ステロイド剤（プレドニン40mg）の投与にていきなり数値を下げて、そこから安定させるまでには、長い闘病生活（ステロイド剤の副作用）をしいられる。自己免疫性肝炎から急激に肝硬変に移行する例が多いのも、肝臓内の熱処理ができないためにいきなり肝細胞が破壊されるためではないだろうか。薬で一時的に数値を下げて、肝臓自体に回復する機能がなければ、薬に頼って数値を維持するしかなくなり、次なる病変に進んでいく。

母親も5年後には肝硬変になると宣告されていたので、本人もいい気はしない。肝硬変の末路はほとんど死の転帰をとるのだから、看護師としてステロイド剤の副作用の怖さ、肝硬変の予後の悪さ、そのような症例に立ち会ってきているので誰よりも現場を知っている。

薬にも縋る思いで、治療を始めたのである。もしも筆者に構造医学の知識がまったくなかったらなんの役にも立たないまま、あれよ、あれよという間に病状は進んでいったことであろう。母親の危機的状況を救えたことに、あらためて構造医学のすばらしさを思い知った。

しかし、肝臓の数値が少し上がったところに治療していれば、もっと早くに治っていたと思われる。肝臓機能が悪くなったら氷冷却がよいのだとの話は、以前から母親にはしていたが、症状がでなければ真剣に治療に取り組まないもの

である。

今回、わずか1症例であるが、筆者にとっては母親の危機を救え、これほど治療をしていて満足な思いをしたことは他にはない。構造医学に巡り合い、10数年勉強してきてよかったと心より感謝する次第である。

追伸

・平成16年3月26日

GOT<AST>：24、GPT<ALT>：20。担当医から何か他に治療をしたのかと聞かれたそうである。なぜこのように急激に数値が正常値に下がったのかわからないからであろう。母親が氷冷却の話をしたところ、肝臓には毛細血管が無数にあり、それを冷やすと血管が収縮して血行を悪くして肝臓に悪影響を与えるので、氷で冷やすのだけは止めたほうが良いといわれたそうである。肝臓疾患一筋に治療をされた先生だそうで、一般的に冷やすと血管が収縮するので血行が悪くなると学校で教わったことを思い出す。まして肝臓を氷冷却するなどは、聞いたこともないだろうから仕方がないのかもしれない。肝臓疾患に氷冷却「構造医学の処方」が有効であることが、早く一般に認知される日が来るのを待つのみである。

・4月23日

GOT<AST>：19、GPT<ALT>：14。

・5月21日

GOT<AST>：18、GPT<ALT>：11。

<参考文献>

与芝真著「肝臓病の生活ガイド」医歯薬出版